

バリアフリー財布で社会奉仕



バリアフリー財布の考案者の須藤常務

しについて配慮、札入れは四段あり、金種毎の収納を可能にしているほか、差し入れ口に金属製の小さな目印(直径1cm程の球)を一個から三個付け、どこにお札が入っているかが容易に判断できる仕組みになっている。

これらの工夫は、実際に視覚障害者の意見を聞いた上で取り入れ、更にこれらの人にモニターとなってもらい改良を加えてきた。

「この財布の小売は考えていないが、視覚障害者の希望があれば提供」する考えだが、あまりの反響や問い合わせの多さから商品化も考えていくことも検討している。

墨田区で皮革小物製造業をしている(株)駒屋(須藤信秋社長)は昨秋、同社創立五十周年を記念して、地元視覚障害者が使いやすいように工夫を凝らした「バリアフリー財布」を考案・製作し、地元の視覚障害者に六百個寄贈して話題になったが、「商品としての価値が高いことから新たに考

案・製作を進めている。財布は、視覚障害者の使い勝手を最優先に考え、スナールの引き手部分に金具を付け、簡単にストラップが付けられるようにしたり、身体障害者手帳が収まるポケットを付けたりといった工夫が凝らされている。中でも財布本来の役目であるお金の収納・取り出

皮革小物に関しても国内製造業は厳しい環境下にある。アイデアや企画の良し悪しで、生き残りを進めているようだ。

定期券

障害者手帳のサイズ

「創業記念パーティーで散財するより、半世紀を過ぎた地域に貢献できれば——東京



須藤さんが自治体によって違うという障害に出くわした。こ

都墨田区の皮革製品製造業、駒屋の須藤文雄常務(51)はこう話す。同社は近く創業五十周年を記念し、区内に約六百人いる視覚障害者にバリアフリー仕様の財布を贈る。例えば小

銭入れのポケットを五つ設け、全体が大きく広がるようにデザイン。小銭を分けて入れ、取り出しやすいようにした。障害者手帳がぴったり収まるポケットも用意した。商品化も考えているが、手帳の大きさが自治体によって違うという障害に出くわした。こ